

始まりとお終いのロッシーニ

早熟の天才は引退してからグルメ三昧だったのか？

ロッシーニ Gioachino Rossini (1792-1868)

1. 弦楽のためのソナタ第1番ト長調 全3楽章 (12:57)

イ・ムジチ合奏団 (1971.06 Switzerland) (Newton Classics 8802041)

※1804年頃、作曲者12歳の作品とされ、同じ早熟の天才モーツァルトの若書きのセレナードや、メンデルスゾーンの弦楽交響曲を連想させる佳曲です。編成にビオラを欠いているのは、「イタリアバロック風」ということでしょうか？（知らんけど！）

2. 歌劇「ウィリアム・テル」序曲【夜明け～嵐～牧歌～終曲】(10:57)

クラウディオ・アバド / ヨーロッパ室内 o. (1989.12 Berlin)

(ユニバーサル・クラシック UCCG-41153)

※「セビリヤの理髪師」「アルジェのイタリア女」等、オペラ・ブッフア（喜歌劇）で一世を風靡した作曲者は、後に、オペラ・セーリア（正歌劇？）やグランド・オペラ（大歌劇？）の世界に転じ、「ギョーム・テル（ウィリアム・テル）」（1829年、37歳時に初演）はその最後の作品となりました。従来、我が国の教科書では、その後は「引退し悠々自適の暮らしを送った」ということになっていますが…。

3. 「老いの過ち」（ピアノ作品集）第4巻より、

「四つの前菜」①ラディッシュ ②アンチョビ（主題と変奏） ③小きゅうり（前奏曲）
④バター（主題と変奏）(24:08)

シュテファン・イルマー（ピアノ）(2007 Germany) (MDG 618 2098-2)

※1836年以降、イタリア北部ボローニャの自宅サロンで毎週土曜日に催していた演奏会で披露するために作曲された膨大な作品群からの抜粋です。いささか自虐的で食い意地の張った曲名に惑わされます（曲名と内容には全く関連が無いようですが…）。しかしながら、内容は斬新な着想と和声法によるもので、次世代のビゼーやサン＝サーンスを超えて、次世紀のドビュッシーやサティをも予感させる響きが聴こえますが、如何なものでしょうか？

(Total 48:02)

以上、大野真澄